

フィリピン遠征

男子監督 山本 康博 (テン・IFT)

フィリピンでのスケジュールは非常に充実していました。マニラでの滞在期間の一週間は、ほとんど練習マッチ。現地のジュニアや大学の選手、練習相手に困ることはありませんでした。親睦を深めつつも、みんなに目標を持ってプレーしてもらえるように練習マッチを進めていきました。現地の選手は思いっきりが良く、ピンチやチャンス関係なく自分のプレーをこなそうとしていました。我々も学ぶ部分はたくさんあったように思います。

1月8日、マニラから飛行機で約1時間、セブに移動です。セブへの遠征は初めてになります。現地でのもてなしはとても寛大なものでした。

セブでのスケジュールは3日間、現地のジュニアとの練習マッチでした。セブのジュニアはマニラに比べるとレベルも高く、モチベーションの面でも勝っていたように思えます。苦戦する試合も多く、選手一人一人いろんな課題ができました。

フィリピンは、私自身3回目の訪問になります。初めて訪れたのが、16年前に参加したこの兵庫県遠征でした。今回の参加は、何か運命的なものでした。

16年前のフィリピンと比較すると空港もきれいになり、経済の発展を感じました。まず、空港を発発すると目に入ってきたのはフィリピンの町の風景。私にとって前回と大きく違うところは、引率者として訪れているということと、自分に子供ができたということです。経済が発展したとはいえ、日本とは比較にならないほどの貧困の町の風景でした。初めて見る選手たちにとっては、少し衝撃的な光景だったかもしれません。車が止まれば小さい子供が食べ物やお金をもらいに近寄ってきます。その子供がなぜか自分の子供と重なり、胸が苦しくなりました。これがフィリピンと分かっているながらも16年前とは違うものを感じました。日本の子供がいかに恵まれているか、日本のテニスプレイヤーがどれだけ恵まれた環境で練習できているかを今回の遠征で選手たちに感じて欲しかったです。

遠征中にうれしい出来事がありました。16年前にホームステイしたクルズさんとの再会です。

16年の歳月は姿・形は変えてしましますが、お互いの記憶・思い出は変わらないものだ、感激いたしました。また、息子のタディーは、今回対戦した大学のコーチを務めており、前は選手としての対戦でしたが、今回はお互いコーチとして再会し、対戦をしました。今回の遠征で一番いい思い出をさせてもらったのは自分自身かもしれません。

帰国し今回の遠征を振り返りました。場所が変わればたくさんの刺激を受けます。人と出会えばたくさんの思い出ができます。このようなチャンスは人生何回もありません。参加した選手はこれからの人生にしっかりと生かしてもらいたいと思います。また、海外で活躍しようと思ったら語学が必要になります。このような遠征をさらに充実させるためにも語学の勉強をしてもらいたいと思います。

最後に、このようなすばらしい経験ができたのも坂本会長をはじめ、兵庫県テニス協会、現地のホストファミリーの皆さまのサポートのおかげだと思っています。厚く御礼を申し上げます。また、今回一緒に同行していただいた、古田コーチ、小川さん、最高の仲間ができたことを幸せに思います。自分自身も今回の遠征を通じてたくさんのことを学びました。この経験を無駄にせず、自分のテニス人生に生かしてまいりたいと思います。

